

オンライン日本語教材の開発と今後の可能性

町田恵子先生インタビュー

コロナ禍によって、一気に普及が拡大した観のあるオンライン教育。

そこで使われる教材はどのようなものであるべきか？

長年にわたって日本語テキストの開発に携わってこられた町田恵子先生に、これまでに携わったテキストのこと、そしてオンライン教材として新たに開発した eTRY! の利用方法や、これからのオンライン学習のありかたについて伺いました。

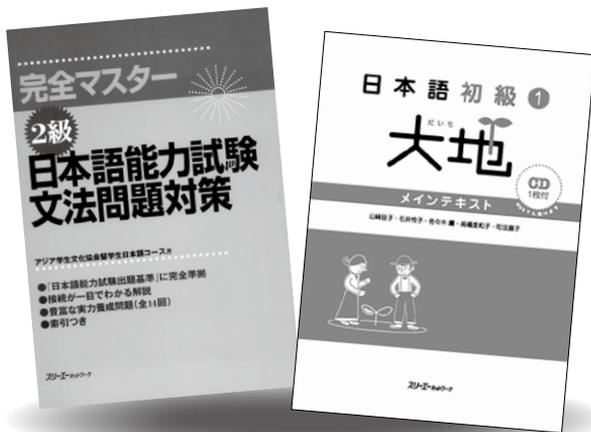
教材開発にかける思い

——町田先生はこれまでいくつもの日本語教材を開発されていますが、まずそれらの教材の開発の経緯やコンセプトなどをお聴かせ下さい。

私が始めて日本語教材に関わったのは、『完全マスター』（スリーエーネットワーク 1997年）という本でした。ただ、これについては日本語能力試験の2級を出したあと、3級と4級については出版社の判断で日本では出版しないことになり、台湾でローカライズ（台湾語）版を出して終わりました。当時、日本の留学生は中韓の学生が中



（まちだけいこ）通っていた中国語教室の中国人講師の本職が日本語教師だったことから日本語教育の仕事を知る。1988年12月の第一回日本語教育能力検定に合格。1989年4月中国残留孤児定住促進更生施設塩崎荘にて日本語教師生活をスタート。同年6月笹川医学奨学金制度事前日本語教育のため3か月間中国・長春に赴任。現地の医科大学で日本に留学予定の学生に日本語教育を行う。89年日本外国語専門学校非常勤講師、92年笹川医学奨学金制度事前日本語教育のため2度目の中国・長春赴任。91年10月よりABK日本語コース講師、同教務主任、副校長を歴任。2017～20年アスク出版勤務。



れから機能シラバスとって、例えば「謝る」、「お願いする」など機能をベースにしたものです。

当時は、場面シラバスや機能シラバスだと難易度に配慮がないから学習者の負担になる、あるいはその時は使えるけれど応用が効かないと考えられていました。それで基本的には文法ベース、構造シラバスの本が主流を占めていたわけですが、それも、やさしいところ

から難しいところへ順を追って勉強していったものの、結局話せない、聞けない、コミュニケーションできないといった批判がありました。

私たちにもその思いはあって、新しい初級のテキストを作ろうとなった時、基本はやさしいものから難しいものへという形で進む文法ベースのものにしながらも、そこに現実に使われる場面を取り入れて、実生活と結びついた、楽しく話せるようになるテキストを作りたいと思ったんです。そうした思いが『大地』になりました。

発話意図がわかる例文を

—— 実際に日常会話で使われる日本語をテキストに入れていくという考え方でしようか。

昔のテキストには大きくわけて3つのベースになる考え方がありました。構造シラバスとって文法をベースにしたもの、場面シラバスとって“お店で”“空港で”というように場面をベースにしたもの、そ

—— 次の『TRY!』（アスク出版2013年）では『大地』をさらに発展させたと考えていいでしょうか。

言葉はそもそもコミュニケーションの手段で、自分の意見や気持ちを伝えるために学習するわけです。だから『大地』でもそうでしたが、『TRY!』では現実に遭遇す



英語、中国語、ベトナム語版が揃ったTRY！

るような場面で、「いつ、誰が、どこで、どんな気持ちで話しているか」といったことを意識してテキストにしていきました。

それは会話だけではなくて、例文一つひとつについてもそうです。昔の文法書の例文は独白という形が多かった。例文を作っている先生方は文法項目を教えるというのが主な目的ですから、どうしても単発の一つの文で例文が終わってしまう。独白の例文では、誰が、いつ、どんな気持ちで、どこで喋ったか、ということがわからないんです。

例えば「昔、よくいっしょに川で魚をついたね。 そうだったね。あの川、今でもあるかな？」という例文があります。これは言葉としては簡単ですが、この話し手は何歳くらいの人で、昔って何年前で、その時この人たちはどこに住んでいて、今もそこに住んでいるのか、今どんな気持ちで話しているのか・・・そういうことをこの文の中から読み取っていかないと、発話意図がイメージできません。『TRY!』には、それをイメージ化できるような例文を揃えたつもりです。

作るときには本に載せた例文の3倍から5倍の例文を作り、その全てについては誰がいつ、どんな気持ちで言っているのかと考えて、必然性のない例文は全てカットしていきました。そして残ったきちんと場面が想定できる、話者の気持ちが読み取れる例文だけを載せています。

最初に見本文、実際にその表現が使われている場面から入ります。その場面は母語での言語活動で経験済みのことです。学習者は使用場面をイメージしてから学習をスタートできます。

——では『TRY!』をつくることになったきっかけなどがあれば教えてください。

先ほどの「いつ、どこで、誰が」という現実には即した話の続きになるのですが、日本語能力試験が5レベルになったときにABKの講師たちで勉強会をしたんです。そこでそれぞれのレベルでどんな能力が要求されているか、それを達成させるためにはどんなアプローチが必要か、これまでの文法のテキストでは何が足りなかったのか、



ということをみんなで話し合いました。それがちょうど（東日本大震災があった2011年）3.11の頃ですが、学習者が来なくなって先生方はこれから先、日本語教育はどうなるんだろうという不安の中にいたんです。でも逆に言えば、日ごろ忙しい先生方に時間ができたとも言える。その時間を有効活用して文法のテキストを作ろうということになったんです。

その時、自分が今までどう考えてきたか、他の人はどう考えているかといった意見交換もして、自分の教える能力という点でもいろんな気付きがありました。そうしたところからみんなで勉強をして出来たのがこの『TRY!』なんです。

TRY!の特徴と使い方

——『TRY!』にはN5～N1版までありますが、全て同じつくりになっているのですか。

N5、N4とN3以降は全く作り方が違います。N3～N1は、これからそのレベルの勉強を始める人が、1つずつ新しいことを学んでいく想定で作られています。

N5、N4について、初級レベルということですが、今までの構造をメインにしたテキストですと、未習のものを入れてはいけないという前提があるので、最初の部分では「初めまして、私は～で

す」しか使えません。しかし実際の言語使用場面はそれだけでは成り立ちませんから、N4、N5に関しては必要であれば後で出てくるもの、未習のものも入れて、文全体で表現として扱っています。未習のものを入れても自然な日本語、その場面で話すであろう日本語にすることを心がけました。

そうしたケースはそれほど多くはないのですが、前の課で表現としては習っているものが後の課で再び登場し、実はこれはこういう文法ですよと習う。学習者は大人が前提ですから、テキストに出てくるような日常会話は普段母語で話しているわけで、そこに本来言葉にすべき表現が入っていなければ不自然に感じるわけです。だから極力自然な文になるようにしてきました。

—— 具体的にはどのような使い方を想定されているのでしょうか。

N4、N5では、そのレベルの勉強を終

えた人が、『TRY!』で復習して、テストを受けるということを前提として作りしました。ですからN5版では最初から「まず、ました、ませんでした」と出てくるわけですが、この本が初めての日本語テキストである人は突然それを見ても意味がわかりません。そこで、『TRY!』を使って日本語の勉強を始める人でも使えるテキストとしてN5より下の『TRY! START』を作ったわけです。

——では『TRY!』の主な特徴をあげていただけますか。

この本には三つの特徴がありますが、一つは使用場面がイメージできるものを作ろうということでした。それまでの文法テキストは完全マスターもそうですが、項目があって例文が三つ、四つ並んでいる形でした。シチュエーションがバラバラでしかも伝える相手のいない独白のような文ですから、実際の利用シーンや話し手の感情などがイメージできないものが多かったように思います。

でも、実際には、例えば、①「台風は日本に上陸しないということです」という文と、②「台風は日本に来ないって」という文はどちらも機能で言えば伝聞なのですが、使う場面が全く違います。校長先生や社長に向かって話す際、①は使えますが②は困りますね。しかし同じように伝聞の要素として並んでいたら、学生には区別がつきませんから、まずどんな場面で使う言葉なのか、それは書き言葉なのか、友達同士の会話の

中で使われるものなのか。そういった使用場面を学習者がわかるようにということで、最初に見本文を載せています。

見本文を載せることについては、必要ないという意見もありました。しかし学習者は大人で、当然日常生活の中で同じような場面を経験していますから、どんな時に使うのかという使用場面をイメージしてもらうために見本文は不可欠だと考えました。

この本が出たばかりの頃は最初に文法項目だけをやり、時間があれば最初の見本文に戻って、「文法を習ったからわかりますよね？」という感じで使う先生が多かったのですが、最近はず見本文をやって、そこで学習者それぞれが考えたイメージが本当にその通りなのか、次の項目ごとに確認していくという形でやっただきっている先生が増えているようです。

——文法項目を先にするのはなく、まずこれから習う表現がどんな場面で誰と行われているのかをイメージしておくことが大切ということですね。

語学に関しては、私たち日本人は赤ん坊の頃から日本語を習っていくわけですが、それは帰納的なアプローチによるものです。いろんな場面を見て、あそこでああ言っていたけどそういうことかと、あとで理解するという捉え方をしています。

それは大人の学習者でも同じで、自分の頭の中にあるイメージと日本語を結びつけていったほうが使えるようになる。そういう方向を目指したかったので、使用場面が

イメージできるように見本文を載せたという事です。

——では、二つ目の特徴を教えてください。

二つ目は母語の活用です。『完全マスター』もそうでしたが、中級の学生なら日本語で理解してもらいたいというのがそれまでの流れでした。

ですが生まれて初めて目にするものを日本語で説明されても、完全に理解することはできません。大人として持っているスキーマ (schema・背景知識) を日本語の学習に活用するためには、母語で説明してもらった方がずっと楽で、時間も短くて済みます。何より「本当にその意味でいいのかな？」という不安を持たなくていい。母語で早く理解してもらえれば、その分残りの時間を練習にあてることができるわけです。ですから、母語をどんどん活用しましょうというのが2番目に私たちが考えたことです。

——自らの語学学習経験を振り返ってもまさにその通りだと思いますが、語学教育の世界では何か新鮮で斬新な発想のようにも感じます。では三つ目の特徴を教えてください。

三つ目は繰り返し学習ということです。「わかる、できる、使える」という三つのプロセスで、実際に使えるようになるには覚えるだけではだめで、必要な時に思い出せるようにする必要があります。でも単純な

繰り返しでは飽きてしまって効果が出にくいので、同じ文法項目にいろいろな形で触れられるようにしました。

覚えようと思ってがんばらなくても続けていくことで自然と身に付いていくのが理想ですよ。それを目指しました。

それからもう一つ、『TRY!』の副題は「文法から伸ばす日本語」ですから文法のテキストではあるのですが、『TRY!』の勉強で得た知識が聴解や読解などのコミュニケーション全てで使えるようにということで考えています。それぞれのレベルで話せることは違いますが、それぞれのレベルの中で必要な文法知識を身に付けて、それを使ってちゃんと表現できるように、そのレベルなりの表現力が向上できるようにということで考えています。

初めてのオンライン教材 eTRY!

——その『TRY!』をベースに、オンライン教材である eTRY! を開発されましたが、『TRY!』との違いなどを教えてください。

内容的には本と同じなのですが、eラーニングにはeラーニングの長所、短所があると思うので、それを生かして eTRY! を作りました。

まず大きな特徴としては先生と生徒のやり取りによる授業動画があるということです。今までのオンライン教材は、項目があってそれに説明と練習があるもの、先生が一方的に授業で説明をしてそれに補足練



はじめまして、ハイです。
おとうさんも だいがくせいですか。

Point
7-3

N + も
mo



When two things share a similarity like in “ハイさんは だいがくせいです。おとうさんも だいがくせいです”, then も is used.



はじめまして、ハイです。
おとうさんは だいがくせいですか。




eTRY! より

習が付いているものという2種類が一般的で、授業風景の動画を入れているものは少なかったのではと思います。

NHK テレビの語学講座は先生と生徒がやり取りをするわけですが、eラーニングでもそのような形で、実際学習者はそこにはいないけど、自分も授業に参加しているような気持ちになれる。先生が「ここがポイントですね」と言うと、「ああそうか」と思ったり、画面の学習者が間違えるとそこが意識化されて残る。画面の学習者の答えに共感したり感心したりする中で使い方のイメージができるように、ということで授業の様子を収録しました。

—— 1人で淡々と進めるより、画面上の生徒と自分との比較ができることで、より意識化がなされるわけですね。

はい、一緒に学んでいるという仲間意識み

たいなものが芽生えるといいなと思います。

もう一つ、語彙学習、言葉の学習をちゃんどできるようにという工夫がeTRY!には入っています。具体的に言いますと、初級レベルで登場する語彙はほとんどイラストにしている、イラストにできないものについては全て各国語に翻訳しています。まず山とか海とかのイラストが出てきて、その後一回「ヤマ」と言ったあとブランクになって、自分で発話するようになっています。次にイラストが並んでいて、「ヤマ」と聞こえたらそのイラストを選んでいくという形です。それから、山のイラストを見て「やま」のひらがなお選ぶとか、時間制限があって、迷っていると時間切れになる。これが5段階ほどあり単語の学習ができるようになっています。語彙の学習というのは自己責任と思われがちですが、語彙はコミュニケーション能力の重要な基礎部分ですから、それらを無理なく繰り返すことで自然に覚え

ていく。そして、いつでも思い出して使えるようにという工夫をしています。

—— eTRY! はどのように使われることを想定した教材でしょうか。学習は eTRY! だけで完結できるのでしょうか。

eTRY! 自体は一人で行うことができますが、その後、教師と一緒に確認の授業を行うことを想定しています。自習は他からの刺激がまったくなく、勉強したことの成果も見えにくいので心理的な負担もすごく大きくなります。人は飽きやすいので、それを継続していくのはすごく難しい。そこで挫折してしまうと自己嫌悪になってしまいます。

私も英語のオンライン教材を5、6種類使ったことがあります。全て途中で挫折しました(笑)。その挫折がなぜ起きたのかも教材開発のための一つの勉強だと思ってやりましたが、やはり外部からの刺激というのは絶対に必要だと思います。先生がいて、一緒に学ぶ仲間がいるという環境は、学習者にとって非常に心強いものなんです。コミュニケーションするために言葉を学んでいますから…。

—— その場合、どのような学習の進め方が想定されているのでしょうか。

あらかじめ設定したスケジュールに従って、e-TRY! で事前学習をしてから教室で教師と一緒に学習をして、さらに自分で復習をするという形を想定しています。場所は必ずしも学校である必要はなく、塾でもポ

ランティア教室でもいいんです。教室に通うのが難しい人でも、ZOOM などを利用すればオンラインで参加出来ます。そこで1日1フレーズのように切り取った形ではなく、ある程度まとまった形で学び、その会話の場面をイメージできるようにできればと思います。ですから教室活動では e-TRY! で学んだことを問答形式でアウトプットするのがメインになると考えています。

—— e-TRY! は開発されて間も無いわけで、これから様々な意見を聞いて改善していかなければならない部分もあると思います。今現在の eTRY! のメリットと、今後ここをこうしていきたいというところはありますか。

eTRY! の利点は毎日学校に通えない人でも授業が受けられる環境が作れるということです。言葉の勉強ですからやはり交流の中でのコミュニケーション、その中で言葉の運用能力が育っていきます。そこで授業の動画があるということは、実際に教室に行けなくても授業が受けられるということです。そこが一番優れているところだと思います。

現状で気になっているのは録音機能がないということです。言葉ですから実際に口から声を出して、一生懸命話すことを繰り返すことで話せるようになるわけですが、その発話を促すツールとしての録音機能がないのが一番の問題だと思っています。

英語などでは双方向で発音の診断をしてもらうものもありますが、そこまではでき

なくても、自分で口から発した音を聞いて勉強していくというプロセスが欲しいと思っています。

オンライン日本語教育の方向性

——— この2年間のコロナ禍で、日本語教育業界はオンライン化が一気に進んだと思います。その意味でeTRY!は入門から上級まで多言語化されたオンライン教材として完成されており、先見性があったと言えると思います。今後のオンライン日本語教育の方向性、あり方について、お考えをお聞かせください。

オンラインがさらに発達していけば、わざわざ日本に留学しなくても、いつでもどこでも誰もが、置かれた環境や経済力に左右されずに日本語を学ぶ機会を得られます。外国にいても、日本に来て働きながらでも、ある程度の日本語力を身に付けられる。

実は初級の勉強は国で媒介語を使って進めた方がストレスにならなくていいんじゃないかと思っています。その上で日本の大学や専門学校で専門的な勉強をしたいという人は、日本に留学すればいい。オンライン学習である程度の日本語力を身に付けてから日本に来た方が、日本で生活にも馴染みやすいし友達も作りやすい。ですから日本で生活を始めるための準備として、母国でオンライン学習を行っておくことはとても有益だと思います。仕事のために日本語を勉強するまともな時間が取れない人でも、勉強を続けられるのもいいことですよね。

更には、オンラインで学習できるものの中に生活者のための日本語であったり、ビジネス日本語であったり、介護の日本語であったりといったものが分野別に開発されていけば、より短い時間で自分に必要な日本語が手に入りますから、理想的だと思います。

——— アジア学生文化協会（ABK）では文化庁の「ウィズコロナにおけるオンライン日本語教育実証事業」にeTRY!の「START」と「N5」を使って参画しようとしています。この企画に対しての期待や、留意点などがあればお話しください。

学びたい気持ちがある人は誰でも、いつでも、どこでも楽しく学べる環境を作り出すことを最終的な目標として、今回の実証事業では実際にどんな問題があるのかを知って、その対応策を検討できればいいと思います。

留意点と言いますか、私自身が忘れないようにしていることは、学習者それぞれニーズや到達目標は違うので、それを尊重したいということです。また、現地の状況やネット環境もそれぞれ違うと思います。ですから実証事業に関しても、こちらの意図をお伝えしたうえで、皆様からいただいたご要望とかご指摘にきちんと向きあって改善していければと思います。

——— 本日は長時間にわたりお話いただき、ありがとうございました。今後のご活躍を期待しております。